

神奈川における 視覚障害者レクリエーションの展開（2）

— 盲人卓球 —

- 渡辺文治 （神奈川県総合リハビリテーションセンター 七沢ライトホーム）
 塩沢哲夫 （神奈川県総合リハビリテーションセンター 七沢ライトホーム）
 末田靖則 （神奈川県総合リハビリテーションセンター 七沢ライトホーム）
 古畑英雄 （社会福祉法人 光友会藤沢障害者自立生活援助センター）

キーワード：視覚障害・スポーツ・盲人卓球・盲人卓球協会

1. はじめに

球技は、視覚障害者にとって、一般的に難しい種目といえる。ボールの動きは3次元であるため、必要な情報の処理が難しい（ただし、テニスの例、弱視卓球の例などはある）。しかし、晴眼者と同様に球技を楽しみたいという願望から、これまでさまざまな工夫がなされてきた。その結果、現在では、全国的な規模で、盲人卓球・盲人バレーボール・盲人野球・テニス・ゴルフなどが行われている。

これらの種目の中で盲人卓球は、最も競技者が多く、参加者の年齢も幅広く、盛んに行われている。本報告では、神奈川における盲人卓球の現状と、問題点を中心に述べていく。

2. 盲人卓球とは（競技の説明）

用具

卓球台（コート）：図1に示すような、継ぎ目なしの1枚板の台。コートの縁に（サイド・エンド）、フレームがある。エンドフレームの外側にセンターを示す突起がある。ネットは通常とは上下逆に、コートから4cm上にあげて張る。

ラケット： ラバーを張らない1枚板状のもの。

ボール： 通常のものの中に鉛玉3個が入ったもの。

ゲーム方法

普通の卓球とは異なり、ボールを転がしてプレーする。空中ではなく、コート上を転がし、コート上4cmに張ったネットの下を通過させる。相手の打ったボールが自コートのエンドフレームにあたる前に、相手コートに打ち返す。ボールがエンドフレームにあたり、コート外に飛び出した時点でプレーは中断する。

プレー中は、全盲・弱視を問わずアイマスクをする。

プレー開始前にトスをする。言葉でグー・チョキ・パーをいう（口じゃんけん）。勝った方が、サーブ権かレシーブ権、コート選択権を持つ。

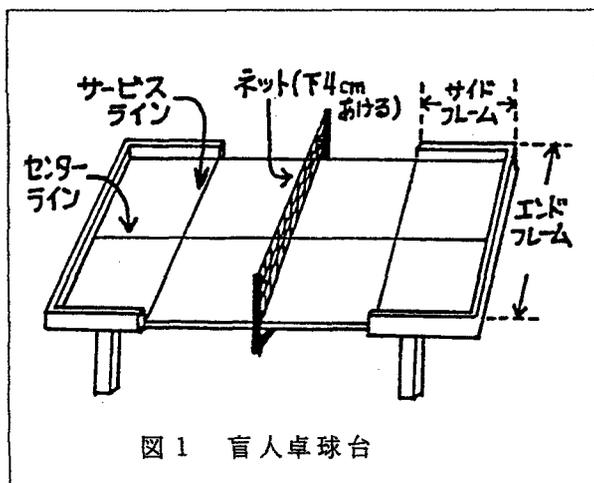


図1 盲人卓球台

サーブは5本ずつ行う。

正式には21ポイント、3ゲームズマッチで行うが、11ポイントで行うことが多い。

なお、視力の程度によって、男女それぞれ3区分、計6区分に分かれる。ただし、大会によっては男女の2区分で行っている例もある。

競技区分： 視力0の部、光覚弁・手動弁・指数弁の部、0.01以上の部の3区分

アイマスク： 必ず目隠しをする（視力に差があるためハンディとならないように）。

3. 盲人卓球の現状（プレーヤーとそれをとりまく環境）と経過

（1）卓球競技大会について

神奈川県身体障害者スポーツ大会（第2部盲人卓球）・けやき大会（相模原市）・藤沢市長杯争奪盲人卓球大会という3つの大きな大会があるほか、地域の大会、施設主催の大会、後で述べる盲人卓球協会主催（全国大会や関東ブロック大会の予選）のものなどがあり、年間を通して参加可能な大会が実施されている。

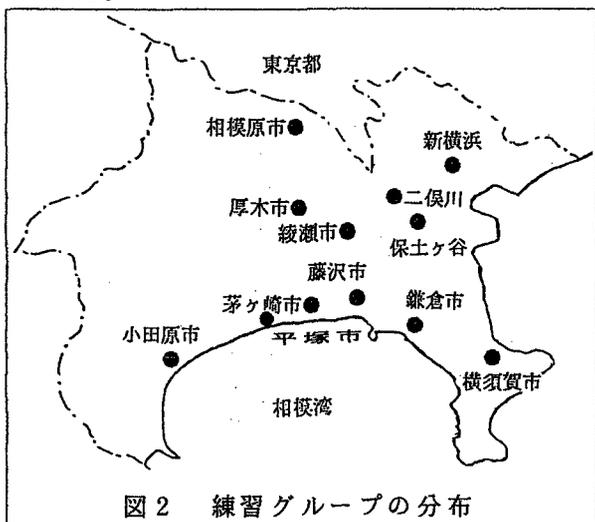
（2）プレーヤーについて

神奈川県内の練習グループを、図2に示した。12のグループが、月2回程度定期的な練習を行っている。1988年の調査に比べ、県西部への広がりがめだち（小田原、茅ヶ崎、平塚）、全県的活動になっていることを示している。

表1、表2、表3に、1994年に行われた3つの大会のエントリー数を示した。なお、表1の県大会は、政令指定都市である横浜市・川崎市を除いたものである。

障害当事者の団体である、神奈川県盲人卓球協会が1992年に設立され、活動を始めた。現在、会員は70名程度であり、実際に競技を行っている者でも、団体加入などで会員になっていない者も多い。また、各大会にエントリーしている人数は90名弱であるが練習グループのメンバーの中にも練習には参加するが大会には参加しない者も多い。これらの数字から、実際に練習に参加するなどの競技人口は100名以上であると考えられる。

表4に1993年度の卓球協会会員に対するアンケート調査の結果を示した。男女差は特に無い。また、競技者の年齢のピークは50代である。40代～60代が90%前後と比較的年齢の高い層が多い。全体として、競技者・練習グループは増加している。しかし、今後は若年層の競技者を増やして行くための働きかけも必要となってくるだろう。



（3）競技環境について

・設備等

盲人卓球のためには、専用の卓球台と騒音のない静かな部屋が必要となる。また、視覚

表1 第33回神奈川県身体障害者スポーツ大会
第2部盲人卓球 区分別エントリー数

区分	0	光覚・指数	0.01	合計
男	21	17	8	46
女	15	17	9	41
計	36	34	17	87

※ “0” … 視力がない全盲の部
 “光覚・指数” … 視力が光覚弁・手動弁・指数弁の部
 “0.01” … 視力が0.01以上の部

表2 第10回けやき大会（相模原市）区分別エントリー数

区分	0	光覚・指数	0.01	合計
男	21	19	7	47
女	17	9	9	35
計	38	28	16	82

表3 第9回藤沢市長杯争奪盲人卓球大会エントリー数

区分	なし
男	38
女	31
計	69

※ 視力による競技区分はない

表4 年代別会員数と平均年齢（％）

	男	女	合計
20代	0	1	1
30代	1	1	2
40代	7 (28.0)	8 (28.6)	15 (28.3)
50代	9 (36.0)	10 (35.7)	19 (33.8)
60代	6 (24.0)	8 (28.6)	14 (26.4)
70代	2	0	2
合計	25	28	53
平均年齢	53.5	51.6	52.5

障害者は移動に制約が多いので比較的交通の便利な場所であることが望ましい。神奈川県内には、およそ30カ所の施設（体育館、福祉会館、入所施設など）に、合計50台ほどの卓球台があり、遠方まで出向かなくても練習が可能な状況にある。

・サポートする人間

指導者 … 審判のできる者は比較的多いが、競技の指導のできる者は少ない。特に、他に障害を持つケースや初心者、高齢者に対する指導のできる者が少ない。

審判 … 競技大会以外にも審判は必要であるが、特殊な競技であるため、審判も少ない。その他のボランティア … 指導者や審判以外にも練習の手助けをする者が必要となる。そのためにはある程度の競技に関する知識が必要となる。

審判養成講習会 … 通常、スポーツの指導者や審判は、実際に自分で競技を行っている者の中からでてくることが多い。しかし、視覚障害者の競技であるため、指導や審判には限界があるため、別個に養成することが必要となる。主に、練習のためのボランティアの養成が目標である。県や市などの行政が主催するもの、視覚障害球技審判協会や盲人卓球協会などの団体が主催するものなどがある。

競技者のための講習会 … 審判の養成とほぼ同様である。地域に指導者が少ないため、基本的な点での練習を含め、競技者の技術向上の重要な機会となっている。

盲人卓球が盛んになった理由として、次のようなことが考えられる。

- ①個人競技なので少ない人数でも練習や試合が可能
- ②専用の卓球台があれば会議室などの狭い場所でもプレーが可能
- ③動きが小さく、運動量も少ないので年齢が高くても参加可能
- ④室内競技なので年間を通じてプレーが可能
- ⑤全国共通の統一ルールがあり（身体障害者スポーツ規則）、全国レベルの大会がある。

4. おわりに

実際に競技者となる障害当事者・競技環境を整える行政・活動をサポートするボランティア等の3者が有機的に結びつくことで、神奈川では盲人卓球が盛んになった。当初は、施設職員やボランティアが始め、行政に卓球台の設置や養成講習会の開催などの環境整備を要求し、行政がこれに応え環境を整備すると、競技者が増加。さらに様々な要求が行われ、環境が整備されていくというような、プラスの循環が起きる。今後もこの良い循環を保つよう努力していくことで、神奈川の盲人卓球をますます盛んなものにしていくことができるだろう。

《参考文献》

- 渡辺文治：神奈川県における盲人卓球 ―― 練習を支援するボランティアを中心に ―― (1990)：ロービジョン研究会第3回論文集：1～5
- 渡辺文治他：神奈川における視覚障害者のレクリエーション実態調査(1990)：第28回社会福祉研究発表大会：123～125
- 渡辺文治他：視覚障害者のレクリエーション・スポーツ(1992)：第30回社会福祉研究発表大会：188～190
- 渡辺文治：視覚障害者のレクリエーションとボランティアの役割(1992)：日本レクリエーション学会第22回大会論文集：22～24
- 渡辺文治他：視覚障害者のスポーツと施設の役割(1992)：身体障害者リハビリテーション研究集会'92：92～93
- 渡辺文治他：神奈川県における視覚障害者のレクリエーション(3) ―― レクリエーションの種目とサポートする人間について ―― (1993)：第2回視覚障害リハビリテーション研究発表大会：162～165